

50周年を迎えて(3)

「断想」

大和文華館前理事 武田 恒夫

赤松の林につつまれた丘の上に、大和文華館は建てられていて、訪れる時期によって四季の変化が楽しめる。門を入ると、緩やかな坂道となり、のぼりつめたところに城郭風の建物があらわれてくる。館の設計に当たった吉田五十八氏にいわせると、奈良の地に日本的な趣きを求め、あえて桃山時代の重厚な気宇を文華館の構想に託したという記事を、砂川幸雄氏の『建築家 吉田五十八』で知った。むしこ窓とまご壁の立面が古めかしい面影を宿しながら、その一方で斬新な立面を感じさせる。このような周囲の自然との対比が一種バランスのとれた趣きをあたえる文華館であるが、館内に入るにつれて、さらに明快なかたちを以て、別の対比を示していることがわかる。

設計者による展示室の構想では、正方形のプランが求められて、みるからに幾何学

的な室空間を展開させている。近代美術館と見立ててもおかしくない知的な構成である。しかし、見落せないのは、展示室の中心に設けられた方形の坪庭であって、そこには、自然の生気をもたらす一叢の竹が植樹されたことである。竹は周知のように中国では四君子の一つに加えられたり、歳寒三友の一つであったり、その気品と節操によって古来表敬されてきた題材である。これがまた、もう一つの対比を生む仕組みとなっている。

竹叢自体のために、陽射しが必要となり、自然光が導入されることになった。それが館内に明るさをもたらし、通例起こりがちな閉塞感が回避されたことは、館の重要な特色といえるだろう。それだけに列品への影響が懸念されるも、この度の五十周年を機に、課題の一つとして検討されることを期待したい。

文華館の館長には、これまで西洋美術史の大家がその任に当たられる場合が多かった。東洋や日本の美術工芸品を対象とする美術館としては異例であったといえるかもしれない。しかし、館の創設期において、グローバルな視野からの運営という深謀が看取される。ハードな側面ばかりでなく、ソフト面においても館の内外をめぐるさまざまな対比の妙と通底する所があるように思われる。

京都国立博物館で「洛中洛外図」展が開かれていた頃、大和文華館初代館長であった矢代幸雄先生夫妻が来訪されて、熱心に観て廻られた。その後で懇談のお相手をする機会をもった。西欧の都市図との比較もさりながら、展示された洛中洛外図屏風という大画面での詳細にわたるお尋ねは、私の研究にとっても刺激となったことが思い出される。細かな描写内容をめぐって、当時の人達が時世を共感し合っているという仕組みについて、先生は興味をいだかれたようだった。

同じく近世初期風俗画であるが、館蔵品の「松浦屏風」は、それとは系列を異にした婦女風俗図であって、当初以来注目を浴びてきた作品である。とりどりの衣装をまとった美

女たちを一扇毎に画面いっぱいに並べている。美々しい彼女らであるが、その面持ちが無表情に近いこともあって、むしろ造型的な図様構成に関心が向けられることにもなった。ジグザグに立て廻らす大画面形式の屏風絵を作品として鑑賞するために、ケース壁面に貼付けて展示すれば、往時の仕様ではなくなってしまふ。例えば、「松浦屏風」を展示する場合、各扇相互に光の当る人物と影に入る人物との差異が生ずる。設計者は、ジグザグに展示しても影をゼロにするための独自の採光方式をいち早く導入したのである。温故知新というべきか、文華館によせるイメージに、それはふさわしい語であるように思われる。

今は昔、開館間もない頃、文華館正門の前まで出掛けて、その日休館であることを知った。水曜日だったような気がする。門前からでは丘の彼方にあるらしい展示館の姿も見ることが出来なかった。私にとって、文華館に対する第一印象は複雑なものだった。あれから半世紀を経て、50周年記念に寄せてのコラムに蕪辞をつらねている自分に気づき、歳月浅からぬ感慨を感じる次第である。

図1 竹の庭ごしの松浦屏風



図2 桃山時代の重厚な気宇を取り入れたエントランス



図3 松浦屏風(右隻)大和文華館蔵



季刊 美のたより No.170

平成22年5月6日

発行 大和文華館